

## 健康観について

○ 千葉大学教育学部 阿部 明 浩

〈結論〉私達は大部分の人がそうである様に、健康状態をそこなって初めて自分の健康について考える。ある幼児にとっての火傷は一生、火への異常なる注意深さとして心に残るであろうし、ある小学生にとっての骨折は己れの行動の不安定の戒めを呼び起すであろうし、ある中学生にとってアレルギー体質からくる環境に対する抵抗力の弱さは、運動を通して身体を鍛錬することを促がそうし、ある高校生にとって流行性耳下腺炎をわずらえば、不妊という問題を意識しようし、ある大学生にとって受験勉強に追われスポーツの機会のなかった分を取り返そうとヨット部で無理をすれば結核の一手手前に己れを置くことになるやもしれぬ。

W.H.Oの健康の定義には、「健康とは身体的、精神的、社会的に健康であること……」とされている。つまりこの三つの面のいずれが欠けても社会生活では完全な健康とはいえない訳である。それでは人はこの世に生を受けてからどの様にして健康観を形造るのか。古来から哲学的に健康観は述べられてきている。しかし個人的に健康観が創られるべきものならば、どの様な因を持つものなのか。その一つのアプローチとして傷病経験の記憶と関連させて考えてみる。安全教育の面からも個々人の大病(傷病)経験の調査は、間接経験の面から一考を要する点がある。

〈研究の目的〉人にとって傷病経験の積み重ねで個人毎に健康観が形造られるのではなからうか。長期間にわたって病床にあれば事故への反省も起ころうし、不自由さを経験すれば将来への気配りも生まれ様。現在の学生が果してそういう経験をしているのか。過保護の家庭の見られがちな現在、果して傷病経験はあるのかないのか。「病気をしたことの無い人は冷たい」といわれるけれども、その様な人の健康観はどういうものか。安全教育面から個人個人にとってかけがえのない意見を聞くことは間接経験の蓄積をすることが出来様。

〈研究の方法、対象〉質問紙法で行なう、時間は約20分程度。(注:傷病経験とは20才前後の今迄のうちで一番治療に時日を要した経験をさす)①健康観だけを述べさせたのは昭和48、49年度特別看護課程2年生40名、昭和49年度養護教諭養成所2年生30名、合計70名。②健康観と傷病経験に関する質問に解答させたのは昭和50年度小学校課程2年生男女80名、養護教諭養成所2年生29名、保健体育科男女24名、合計133名、総計205名。(何れも千葉大学教育学部学生)

質問事項の内容 ①大病(傷害を含む)で休んだのは何才の頃ですか。②期間はおよそ何日(何週間)位ですか。自宅ですか、病院ですか。③傷病名は何ですか。④身体のどこの部分ですか。⑤休んで思ったこと、何を感じ今度からどんなことに気をつけ様と思いましたか。そしてそれは身体のどの部分か。⑥傷病経験と現在の自分のもっている健康観とどの様に関係しますか。無関係の人はその健康観を述べて下さい。⑦傷病経験のない人は自分の健康管理と健康観について述べて下さい。

〈調査の結果〉①傷病名に関して-保健体育科:男子は骨折が最も多く、運動中におきたものである。女子は(1)風邪(2)脱臼(3)気管支炎、小学校課程男子は(1)交通事故(含打撲)(2)風邪、ナシが14名いた。(この中には風邪経験者も若干含まれると考えられる。風邪を大病とみなさぬ傾向がある故)女子は(1)風邪(2)交通事故(含、打撲)。養教:風邪が大部分をしめる。全体からみると男子は(1)骨折(2)交通事故で、女子は風邪である。特に保健体育科の学生男女合わせて、骨折、捻挫、脱臼の占める割合が高い。従って大病経験とされる主な傷病名は骨折、交通事故、風邪である。大部分の学生が何らかの傷病で療養をよぎなくされたと考えられる。又、経験なしは134名中19名である。(この中には風邪も若干含まれ、幼なくし

て記憶なしも含まれる。)

②何才の頃か 全体的に見て男女とも(1)小学校(2)小学校以前(3)中学校の順。③日数に関しては女子は風邪が多い故に2、3日ですむとされるが年に何回もというケースも多い。男子の場合半月の期間が最も多い。④身体のどの部分であるか、男女とも風邪に関連して頸がトップである。男子の場合、上肢、下肢と身体表面、女子の場合身体内部となる。⑤病院か自宅か。男子の場合は病院治療が自宅を上回り、女子は自宅がほとんどである。

以上の結果から総合すると骨折、交通事故、風邪という傷病を小学生時代を中心に経験し、平均して一週間内外の期間療養し、男子は上、下肢と身体表面の部位が多く病院治療、女子は身体内部の部位経験で自宅での治療となる。従って健康をそこない、不自由さを経験することが過去において学生には大部分みられる。

健康観の中心内容、傷病経験の印象の課程別の詳細は省略して結論と考察について述べる。

〈調査結果の考察〉保健体育科の学生は男女とも傷病経験は有る。その経験から生まれる健康観は個人的健康管理といえる。小学校課程男女の健康観への取り組みは傷病経験の少ない故か余り確としたものはみられない。病床経験のない学生は通り一べんの解答で第三者に訴える健康観はない。養護教諭養成課程の女子は健康への関心は高い。只、身近かな些細な病に非常に気かけると同時に社会的に奉仕する気持がその健康観にみられる。特別看護課程の学生は理論的に健康観を形造りW・H・Oの定義の重点を精神的面にとる学生が多い。以上のことから大病経験と健康観を結び付ける意識が学生に見られる。大病経験はかけがえない時間を失うと同時に個人の意識の持ち方によって自己の健康管理に非常な大きい意味を持つと考えられる。しかし安全教育の面からも、大病経験をへずに立派な健康意識を持つ、活発な児童、生徒の育成をはかることが、大切である。

## 二 調 査 動 向

この調査は、千葉大学の保健体育科の学生を対象として行われた。調査は、まず、保健体育科の学生に対して、健康観に関するアンケート調査を行った。その結果、男女ともに、健康観の中心内容として、身体的健康と精神的健康の両方を重視していることがわかった。また、傷病経験の有無と健康観の形成との関係についても、調査結果から考察した。特に、大病経験を体験した学生は、健康観の形成において、より積極的な取り組みを行っていることが明らかになった。この結果から、健康観の形成には、身体的健康だけでなく、精神的健康の両方を重視し、また、傷病経験を体験することが有効であることが示唆された。